

月例報告書 2004年7月

後藤 貴裕

目次

広大な社会差別者と戦うために

- 1．隠蔽諜報活動者の危険性
- 2．人体実験と医療
- 3．専門家やメディアは情報発信にたいする責任をもたないのか
- 4．必要なものは未来を変える力である

## 広大な社会差別と戦うために

私が、このホームページを開設した動機に、犠牲者に対する社会の迫害を訴えることがあった。犠牲者が直面しているのは、兵器の乱用だけではない。少数民族への差別が形を変えて国民の少数者の命を奪い取っている。以前にも紹介した本「BLUEBIRD」には、世界中の医療ネットワーク・医学校の人体実験への関与が書かれている。おそらく私たちは、それよりもずっと多くの集団を相手にしなければならないだろう。電磁・神経兵器の無差別的使用が、いかに、50年以上も継続されたのか。腐敗がどのように社会に蔓延していったのか。この問題で不当な利益を得ているものは大勢いる。新たな被害者・加害者の発生を食い止めることが、私の目標だった。しかし、世代を超えて問題が続いているとなると、加害者や組織を更生する道を探ることがより重要に思える。幸い、兵器開発の根源としてあった戦争は、非現実的な物になりつつある。第2次世界大戦で漁夫の利を得たアメリカが、結局一人勝ちの様相を呈することになってしまったから……。冷戦という対立の維持もとっくの前に不可能になった。

今も残りつづけているのは、権力者と人民との軋轢という古めかしい問題に見える。世界の権力是对立よりも、合致して、脳や心を完全に支配しうる最強技術を共有することを選んだ。近年盛んな「テロとの戦い」という話しも、体制順応しなければこうなるのだといった、人民への見せしめのようにも考えられる。

日々兵器技術や心理攻撃手段にさらされ、後遺症とも闘い続けている犠牲者たちに、人々がさらなる迫害を加えることができるのは、どうということだろう。人々が大衆的なコントロールに支配されていると

いう説がある。しかし、そういったコントロールは所詮子供だましろう。やはり、注意すべきは、犠牲者が未だ少数者でいるという点ではないか。少数者の封じ込めは、諜報活動を駆使すれば達成される。犯罪組織は、十分な資金を持っている。

メディアの買収は、国家規模の金額から見れば、比較的少額の資金でできる。学術組織の腐敗は、それ自体の、より根源的な性格かもしれない……。NASAの20年後の研究予測が的中することほど、恐ろしいことはないように感じる。社会の停滞の影で、常に、悪弊が作られている。社会を改善するために、迅速な行動が重要性を増している。

この問題では、最悪、加害者が自らの行為に何の痛痒も感じないような末期状態を呈している。しかし、この認識は不可逆に変化する。人工の臓器や四肢といった再生医療が一般化すれば、完全な個体の破壊は、脳や意識、心への攻撃にあることの露呈は不可避だ。人の生命を根こそぎにするには、精神医学的拷問を利用するしかない。私自身、ふっと物思いにふけったり、ため息ついたりする瞬間でさえ許容されないまま年月を過ごした。脳や心への攻撃の恐ろしさは、誰もが理解しなければならない。

## 1 . 隠蔽諜報活動者の危険性

計画的拷問の標的になっている犠牲者にとって、一刻も早い救助が必要である。適切に対応すれば、最悪の事態は食い止めることができるだろう。ところが、助けを求める犠牲者が、隠蔽活動によってさらなる暴行に見舞われるという報告を聞く。実験機構の一部だともいえ

る。法務省人権相談所による暴力対応は、私が命の危機に瀕する重大なきっかけであった。職員は圧迫をかけて、黙殺することだけを一心に考えていた。しかも、計画どおりの拷問とは異なり、彼らのやり方には加減容赦がなく、非常に危険だ。無差別的な兵器の使用により生命を脅かされている、犠牲者の訴えを退ける正当な理由はありえない。そのため、隠蔽活動者は、脅迫や詐欺といった、ありとあらゆる薄汚い手段を利用してくる。さらに問題になるのは、彼ら圧迫が、拷問によって損傷し続けられている、犠牲者の精神面に向けられていることだ。計画的加害活動と相乗的に致命的影響を与える。虐待・拷問の訴えをないがしろにすれば、大きな損傷を与えることは予測できるから、これは故意による殺傷だ。野蛮な隠蔽活動者らを野放しにはできない。

## 機関に相談するときの対策

隠蔽活動者らには、マニュアル的な共通性が観測されるが、現段階では、まだまとまっていない。安全のため、相談時に記録を残すことを勧める。信頼の置ける弁護士がいればいっそうよいだろう。精神的ダメージが大きければ、不審を感じるところには一切行かない方がよい。まずは、回復を進めてほしい。法務省人権相談所では、私が訴えている内容は違法であることを、念を押して確認した。しかしながら、相談員の不当な態度は、まるで改まる様子が出なかった。否定的な言葉を重ねて、ひたすら圧迫を加えてきた。法務省のビルから飛び降りるしかないと思った。毎日続けていたランニングも、二三步踏み出しただけで動かないようになった。彼らの手口はあまりに危険である。犠牲者が科学的な証拠を要求されたというのも、とんでもない話だ。法学的根拠はなく、典型的な詐欺にあたる。しかも、訴えている技術には危険な用途があり、万一公的にそのような言明をしたら、大変な問題になるだろう。

じっくりと、問題点や責任を追及していかなければならない。おかしな場面に遭遇しても、あわてないでほしい。詐欺の手口もプロ化しているから、接触するときにはくれぐれも慎重に。繰り返し記しておくが、こちらの訴えは元来無視することが不能である。一切の粗暴な対応は、問題にしなければならない。

## 2 . 人体実験と医療

野暮なタイトルを付けてしまった。人体実験と病院とは、もとより分かつことはできない対象だ。密かな資金援助のもと、大がかりな実験場としての役割を担ってきた。病気の解明だけでなく、殺人技術の探求にも関わっている。20世紀に最も進歩したのは医学だという。その進歩は、一体何に向けられてきたのだろうか。人体実験の多くは、闇のベールがかけられている。特に、日本ではその方面の出版すらろくにない。

私は、実験期間、特に、監視や読心に日々脅かされはじめてからは、人生を丸ごと剥奪されていたと感じている。これは、脳や心といった、人の源泉を標的とする実験の特徴だ。行動範囲すべてにわたり、犯罪スパイが発生させられ、効果的な圧迫を被った。私の場合は、メディア、人物、騒音によるが、攻撃方法には、いくつかの組み合わせパターンがあると考えられる。

兵器開発初期の段階では、脳への電磁波の影響により直接の死者が相当出ているはずだ。現在でも、兵器の効果だとは気づかれず、単なる脳の症状などとして処理されている場合も多いだろう。私自身、過去に一度しびれと脱力を受け、覚醒状態になり入院した。しかも、入

院前に起こったことについて全く診察を受けられなかった。原因もいったい何なのかもわからないままだったが、今では兵器の影響と考えるようになった。

現在では、おそらく、兵器は高く完成したレベルで、むしろ、心理的拷問の道具としての利用が主になっていると考えられる。脳への音声や思考内容の略奪、ストーカーなど、犠牲者に外部からの侵略を明確に認識させ、精神的損傷を与えることは特徴的である。医師に訴えを妄想呼ばわりされたという被害を聞く。私は、前もって医学書に似たようなことが書かれているのを知っていたため、医師に相談することはなかった。本来このような秘密の実験を医師が判断できるはずがない。犠牲者の訴えについて、何か断定できるとしたら、すでに問題と関わっているか、ペテンをやっているかのどちらかだ。患者の話を聞いているうちに、医師自身が病気になることがあると本に書いてあった。犠牲者の話を親身になって聞く医師にたいしても、組織ぐるみの虐待が加えられているとしたら恐ろしい。ペテンによって、犠牲者が適切な治療が受けられていないことは悲劇である。すぐにも助けが必要な人が追いやられている。人生を根本から奪い取る、精神医学的実験の残酷さを一番よく理解しているのは医師自身ではないか。

政略としての精神医療の悪用は、すでに語り尽くされているといつてよいほどなのに、都合のいい悪用は止まないようである。かつて、ロボットミーという脳外科手術を受けた多くの人が復帰困難になった歴史があるという。1949年にノーベル賞を受け、誤った賞を与えたといわれているらしい。しかし、私は、むしろ人体実験を進めるために、計画された賞だったのではないかと推察している。医療従事者への動機付け、一般人のはぐらかしに、ノーベル賞ほど利用しやすいものはないだろう。かつての種種の人体実験において、従事者に盛んな褒賞が与えられていたことが本に記されている。用心しておかなければ、どんな目にあっても不思議ではない。

### 3 . 専門家やメディアは情報発信にたいする責任をもたないのか

専門家やメディアは、多くの恣意的な情報操作に関わっている。人々に不備のある知識を与え、政治的利益を享受している。戦時中にあった情報統制は周知の事実であるが、戦後においても、根本的な改善はなされていないようだ。むしろ用意周到になっていると感ずる。彼らは、政治にとって都合がいいから、操作がいくらエスカレートしても非難されない。電磁波と神経の技術には、初歩的なものからきわめて精密なものまで考え得る。それらがまるごと、公衆の目から遠ざけられているのは不思議なことではないか。例えば、強い電磁ビームで人が死んでしまうということは、真っ先に予測されるのに、一般に入手できるデータがない。

科学の細分化、科学者の部品化という問題は、長年訴えられてきた。科学技術の高度化のため・・・・・・という理由をよく聞かされた。実際にはどうだろう。多くの場合は、狭い分野に必要以上の学者がいて、労力をもてあましてるように見える。やはりこれは、技術や技術者を系統的に統治するための施策だろう。部品化 = 無力化・都合のよい道具、なのだ。どこかの掲示板で、研究をするなら機密になるような発見をせよと書いてあったので驚いた。そもそも、機密研究は国家の恥である。市民が知る権利を標榜するなら、差別の助長にたいして強く反対すべきである。マスメディアは買収されていて、おそらく何の役にも立たない。メディアと銀行を押さえることが、戦争での鉄則というではないか・・・・・・。市民を危険にさらす秘密の所持は、違法と考えられるが、当人たちはどう思っているのだろう。

独裁者の立場から見れば、専門家ほどペテンをやらせるのに都合のよいものはない。すぐに利用されてしまうことは、彼らのモラルが一般人の期待に比してきわめて低いことを示している。それに迎合している人にも問題がある。モラルを失っても平気な人がごまんといふ。

特に日本では、責任を海外の学会や情報センターにまで、転嫁しそうな人がたくさんいそうだ。

#### 4 . 必要なものは未来を変える力である

この技術の威力を知らしめる最も手っ取り早い方法は、電磁・神経兵器による戦争だと、私は考えている。そうすれば、現在核兵器の使用がタブー視されているように、技術の使用がすぐに禁止されるだろう。しかし、膨大な犠牲を出さなければ問題を解決できないのなら、私たちはあまりにおろかすぎる。電磁ビームの人への効果を測定するのは、あながち難しいとはいえない。しかし、それを人に向けることは戦争を意味する。

現代の社会には、個人の価値観やものの感じ方、欲望でさえも、湾曲されてしまう危険がある。グローバル時代が到来しては、現代社会の歪みを逃れるには、もはやひきこもるしかないのか……。受け入れがたい歪みを放置しては、何の進歩もない。後代まで、悪い評判が残るだけであろう。未来を作ること、社会を適応させることこそが重要なのだ。未来に対する責任は、気力や行動力といった、若さにかかっているのだ。ドラえもんが誕生するまで、放っておくわけにはいかない。いくら個人が保険や年金をかけても、電磁兵器を使われたらひとたまりもないように、後世への移りかわりに頼れるものはないのだ。